『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) 39-59

「あるある的表現」としての英語の句複合語[1]

細谷諒太
ryotahosoya@keio.jp

キーワード：句複合語　あるある的コミュニケーション　引用　架空のやりとり

要旨

本稿では「あるある的コミュニケーション」という新たなコミュニケーションを定義して考察する。これは、話し手が「(i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられ、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」という特徴を持つ「あるある的出来事」、あるいはそのような特徴を持つスキーマを言葉で言い表した結果、聞き手が「(iv) 共感を抱いたり、(v) 笑いを引き起こされたり、(vi) 結束感や仲間意識を感じたり」するようなコミュニケーションである。「あるある的コミュニケーション」の成立に寄与する表現の一例として句複合語を取り上げ、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用とみなせる場合には、その句複合語の使用が「あるある的コミュニケーション」を成立させるということを主張する。

1. はじめに

英語には "I-am-better-than-you attitude" のような、句複合語 (phrasal compound) と呼ばれる表現がある。一般に、英語の句複合語では、ハイフンや引用符などでしばしば印付けられた modifier が、後続する名詞 (あるいは形容詞; Cf. Günther et al. 2018) を修飾しており、両者が合わさって全体としては複合語を形成していると考えられている。従来、主にこの「(複合) 語の内部に (修飾) 句が現れている」という形式上の特異性が研究者の注目を集めてきた (Cf. Trips & Kornfilt 2017) が、近年この種の表現についての研究は徐々に広がりを見せており、ファッションブログにおいて頻出するという指摘 (Crawford Camiciottoli 2019) や、構文文法の観点からドイツ語の句複合語が織り成す construct-i-con を記述する試み (Hein 2017) などを含め、様々な視点から分析が進められている[2]。多様性を増しつつある句複合語研究の中でも、とりわけ Pascual (2014) と平沢 (2021) は、「句複合語の modifier がどのような存在であるのか」、「句複合語の機能や効果はどのようなものか」という問いに対する回答 (の糸口となるアイデア) を与えており、人間がこの種の表現を使用する動機の解明に貢献している重要な研究である。この

[1] 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 の支援を受けている。本稿の完成に至るまで様々な貴重な助言を与えてくださった「文法の意味」研究会の皆様、ならびに慶應義塾大学の先生方、研究室のメンバーに感謝致します。

[2] 本稿で挙げる句複合語の先行研究において、必ずしも「句複合語」という名称が採用されているわけではない。

ように、句複合語研究の裾野は広がり、分析も深化しつつあるが、句複合語がコミュニケーションの中でどのような役割を演ずるのかについては、依然として分析の余地が残されている。

本論文では、「あるある的コミュニケーション」という新たなコミュニケーションの形態を定義して考察する。その上で、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用であるとみなせる場合に、その句複合語の使用が「あるある的コミュニケーション」を成立させることを主張する。

本論文の構成は以下の通りである。まず、第 2 節では Pascual (2014) と平沢 (2021) の分析を概観し、句複合語の解釈に関わるメカニズムや機能と効果、また、modifier をどのような存在と捉えることができるかという点について確認する。ここでは「架空のやりとり」や「引用」というキーワードが大きな役割を演ずる。第 3 節では「あるある的コミュニケーション」という、これまで指摘されてこなかったタイプのコミュニケーションを定義した上で、そのコミュニケーションにおいて話し手が提示する「あるある的出来事」あるいは「あるある的スキーマ」に備わる三つの特徴と、そのコミュニケーションにおいて聞き手にもたらされる三つの効果について詳細な説明を加える。第 4 節では、一部の句複合語がどのような仕組みで「あるある的コミュニケーション」の成立に寄与するのかを、架空のやりとり、引用、語の特性に言及しながら説明する。また、コーパスから集めた英語の句複合語の実例を観察して、句複合語が「あるある的コミュニケーション」を成立させる様子を確認する。第 5 節は本研究のまとめである。

2. 句複合語と「架空のやりとり」および「引用」

本節では、「架空のやりとり (fictive interaction)」という概念を用いて句複合語を分析した Pascual (2014) の研究と、名詞 thing を主要部とする句複合語の分析に際し、独自の「引用」を定義した平沢 (2021) の研究を概観する。また、引用に関する Recanati (2001) の主張に触れつつ、これらの先行研究から、句複合語の modifier について現時点で何が言えるかを整理する。

Pascual (2014) は、自身が “fictive interaction compound”（あるいは “direct speech compound”）と呼ぶある種の句複合語の modifier を、「架空のやりとり」の一種であるとみなしている[3]。ここで、「架空のやりとり」という用語は、研究があまり（あるいは全く）されてこなかった様々な種類の語りの手法をまとめるアンブレラタームとして導入されているが (Pascual 2014: 192)、本稿で句複合語の modifier について論じる限りにおいては、この後紹介する平沢 (2021) が用いている意味での「他者」（話し手以外の個人、話し手以外の大小さまざまな規模の集団、または過去の話し手）による架空の発話と捉えて差し支えない。

Pascual (2014) は fictive interaction compound の解釈に関わるメカニズムを次のように分析している。まず、modifier はメトニミーにより、それ自身を一部分として含むような、より大きな

[3] ある句複合語があったときに、それが Pascual (2014) のいう “fictive interaction compound” に該当するかどうかを判定する方法は不明であるが、おそらく全ての fictive interaction compound は句複合語であり、句複合語のうち、modifier がやりとり（の一部）になっている感じのしないもの、例えば “the Charles and Di syndrome (Lieber 1992: 11)” などは、fictive interaction compound ではないと思われる。

シナリオを喚起する。このシナリオが立ち上がる際には、話し手や聞き手が持つ社会文化的・歴史的・日常的な知識や、いまその場で進行中の会話についての知識が利用される。喚起されたシナリオは参照点として機能し、それを経由して、そのシナリオに登場する主要部名詞への心的接触がなされる。このようなプロセスを通して、fictive interaction compound は主要部名詞の下位カテゴリーをアドホックに形成する。

また、Pascual (2014) は fictive interaction compound の modifier が直接話法での引用と多くの共通点を持つと指摘し、それゆえこの種の表現には次のような機能や効果があると主張している。まず、Pascual (2014: 69–70) 曰く、進行中の相互行為の中に言葉による架空のやりとりの再演を生むという直接話法の機能が、あたかもそのやりとりが眼前で起こっているかのような印象を聞き手に与え、それにより臨場感や聞き手を引き込む効果などが生じるという。また、「実演」であるがゆえに、名状しがたい概念を「記述」よりも容易に表すことができるという引用の機能 (Clark & Gerrig 1990) により、fictive interaction compound は通常の複合語では言い表しがたい概念にぴったりとした名前を与えることができる (Pascual 2014: 71)。

Fictive interaction compound の modifier と直接話法での引用との共通点で、もう一つ重要な点は、両者とも独立した文法的な視点を持っているということである (Pascual 2014: 63)。例えば、“She said, ‘I like linguistics.’” という直接話法での引用を含む文には、主文の主語である “She” が指す人物とは別の時点の、人称代名詞 “I” で表される過去のその人が登場し、過去のその人の視点から発せられる「言語学が好き」という言葉が含まれている。同様に、“‘I-never-have-any-homework’ kids” (Pascual 2014: 63) のような fictive interaction compound にも、この表現を用いている話し手とは別の、人称代名詞 “I” で表される誰かの視点から語られる架空の言葉が含まれている。

上に述べたように、fictive interaction compound の modifier と直接話法での引用にはいくつかの共通点があるが、両者には根本的な違いがあるという。Pascual (2014: 64) によれば、前者は過去の現実あるいは想像上の発話トークンの（多少の改変はあるかもしれないが、ある程度は文字通りの）再生産である。それに対して、後者はトークンではなくタイプとしての解釈を要求する表現であるという。このように、Pascual (2014) は、fictive interaction compound の modifier を（少なくとも、直接話法での）引用とは別物であると考えているようである。

Pascual (2014) とは対照的に、句複合語の modifier を「引用」であると主張する研究もある。平沢 (2021) は X thing 構文（本稿の呼び方では、「名詞 thing を主要部とする句複合語」）の分析に際して、従来よりも広く、なおかつ程度性を持った、新しい「引用」の概念を提唱した[4]。

他者（話し手以外の個人、話し手以外の大小さまざまな規模の集団、または過去の話し手）

[4] 平沢 (2021) は、彼の言う X thing 構文の「引用用法」を説明する過程でこのような「引用」の定義を行った。平沢 (2021) には他にも X thing 構文の「遠化用法」の説明など、X thing 構文について詳細な記述があるが、本稿では主要部名詞が thing の場合に特別に焦点を当てるわけではないので、「引用」についての言及を超えて彼の論文の内容に深入りすることはしない。

が実際に（または心の中で）発した言葉（の全体または一部）をあくまで他者の言葉であると（場合によっては引用符を利用することで）示しながら、（場合によっては多少の変更を伴いつつ）自分の言葉に取り込むこと（平沢 2021: 175）

詳細は原論文に譲るが、上の引用の括弧内で補足されている通り、他者の姿を具体的に想像できる度合い、他者の元の発話を用いる量、他者の元の発話を改変する度合いにおいて、平沢 (2021) は様々な程度の違いを認めており、引用行為を程度の問題として捉えている。また、定義から分かる通り、話し手以外の人間の心の中の発話を引用することも可能であり、以下の (1) の太字で強調された modifier を、そのような引用行為として例示している。

(1)　a kind of **can't-believe-my-luck** expression　(Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)
自分の幸運が信じられませんというような表情
（平沢 2021: 180; 強調は原文通り）

このように、「引用」という用語を従来よりも広く、なおかつ程度性を持った概念として捉える平沢 (2021) の定義を採用すれば、（全てではないにしろ）句複合語の modifier を「引用」であるということができる。

先ほど、Pascual (2014) が fictive interaction compound の modifier はトークンではなくタイプとして解釈する必要があると主張しており、彼女はどうやら modifier を引用とは考えていないようであると述べた。しかし、「引用」という用語を用いるかどうかを別にすれば、Pascual (2014) の主張と平沢 (2021) の主張は両立しうる。というのも、Recanati (2001) によれば、引用にはトークンではなくタイプに注意を向けさせる機能があるからである。Recanati (2001: 640) 曰く、引用行為を通して話し手が究極的に聞き手の注意を向けさせたいのは、引用されている個別のトークンそれ自体ではなく、そのトークンの持っている諸性質、すなわち、そのトークンが事例になっているようなタイプであるという。Recanati (2001) のこの考えを採用すれば、平沢 (2021) のように modifier を「引用」と捉えたとしても、modifier がトークンではなくタイプを表しているという Pascual (2014) の主張との整合性を保つことができる。

第2節では、本稿で句複合語と呼んでいる表現の一種を分析した Pascual (2014) と平沢 (2021) の研究を見た。Pascual (2014) の「架空のやりとり」という概念、平沢 (2021) の「引用」の定義、そして引用に関する Recanati (2001) の考えを採用すれば、先行研究の主張を次のようにまとめることができる。句複合語の modifier は（全てではないにしろ）、それを発した時点の話し手とは別の他者（話し手以外の個人、話し手以外の大小さまざまな規模の集団、または過去の話し手）による架空の言葉を引用したものであり、個別の言葉というトークンを引用しているものの、トークンそれ自体ではなく、それを事例とするタイプに聞き手の注意を向けさせることを主眼とした表現である。

3. あるある的コミュニケーション

本節では、本稿にとって重要な概念である「あるある的コミュニケーション」を定義する。その後、定義に現れる六つのポイントについて、さらに詳しい説明を与える。

あるある的コミュニケーションとは、話し手が「(i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられ、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」という特徴を持つ出来事、あるいはそのような特徴を持つスキーマを言葉で言い表した結果、聞き手が「(iv) 共感を抱いたり、(v) 笑いを引き起こされたり、(vi) 結束感や仲間意識を感じたり」するようなコミュニケーションである。ここでは便宜上「話し手」や「聞き手」という言葉を使用してはいるが、書き言葉によるコミュニケーションの場合も含めることとする。

(i)~(iii) の特徴を持った個々の出来事を「あるある的出来事」、(i)~(iii) の特徴を持ったスキーマを「あるある的スキーマ」、「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」を言葉で言い表したものを「あるある的表現」と呼ぶことにする。日本語には既に広く知られた「あるある」という言葉があり、筆者の感覚では、この言葉は「あるあるを言う」のように言語表現を指示することもできれば、「あるあるが起こった」のように出来事を指示することもできる。また、芸人などが発する「あるある（ネタ）」はトークンレベルの出来事ではなくスキーマレベルの内容であることも多々ある[5]。本稿でわざわざ「あるある的出来事」、「あるある的スキーマ」、「あるある的表現」といった用語を導入するのは、「あるある」という言葉が「出来事」を意味しているのか、「スキーマ」を意味しているのか、「言語表現」を意味しているのかが分かりにくい場合が生じないようにするためである。

上記の「あるある的コミュニケーション」の定義において、(i)~(iii) は出来事やスキーマの特徴であり、(iv)~(vi) はあくまでもそれらが言い表された結果、聞き手にもたらされることがある効果であるということに注意されたい。ただし、話し手が言い表した出来事やスキーマの内容自体が、(iv)~(vi) の効果が聞き手に生じる可能性を高めたり低めたりすることは大いにある。例えば、聞き手が (iv) 共感を抱くという効果は、あくまでも、話し手と聞き手の間でスキーマが共有されているということを聞き手が認識することが一因となり生じる効果であるが、出来事やスキーマの内容自体が、聞き手が共感を抱く可能性や抱く共感の強さに影響を与えることは大いにある。

「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」が持つ (i)~(iii) の特徴、および聞き手に生じる (iv)~(vi) の効果は全て程度問題であり、特徴や効果の有無が明確に決まるものではない。ある出来事やスキーマがそれぞれ「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」と呼ばれるためには、それが (i)~(iii) の全ての特徴をある程度備えている必要がある。一方で、「あるあ

[5] スキーマには様々な抽象度があり、具体性の高いスキーマは「出来事」と言っても違和感が無いように思われる。しかし、本稿では時や場所や当事者などの情報が全て特定できるトークンレベルの内容に対してのみ「出来事」という言葉を用い、何らかの情報が捨象されたものに対しては、比較的具体性が高い場合でも「スキーマ」（あるいは「タイプ」）という言葉を用いることにする。

る的コミュニケーション」の成立にとって、聞き手に (iv)～(vi) の全ての効果が生じることは必須ではなく、(iv)～(vi) の少なくとも一つがある程度生じればよい。この説明からわかる通り、あるコミュニケーションが「あるある的コミュニケーション」であるかどうかの判定はきっぱりと白黒がつく類のものではない。あるコミュニケーションが「あるある的コミュニケーション」であるかどうかは程度の問題であり、話し手が用いる「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」が (i)～(iii) の全ての特徴を高いレベルで備えていればいるほど、そして (iv)～(vi) の効果のうちのより多くがより強い度合いで聞き手に生じれば生じるほど、そのコミュニケーションはより典型的な「あるある的コミュニケーション」とみなせるようになる。

以上の説明を踏まえた上で、「あるある的コミュニケーション」の具体例を見てみよう。以下の会話は筆者による作例であり、筆者が「あるある的コミュニケーション」の典型例と考えるものである。

(2) A: 昨日、言語学の授業の課題を締め切り直前に出そうとしたら、ネットの接続が悪くて提出できなかったんだよね。
B: あー、あるあるだね。

このやりとりにおいては、まず、話し手である A さんが「昨日、言語学の授業の課題を締め切り直前に出そうとしたら、ネットの接続が悪くて提出できなかった」という出来事を述べている。このような出来事は、(i) 普段は無意識の知識領域に埋没している出来事であるが、B さんにとっておそらく (ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられる出来事であるといえる。また、この出来事の当事者である「昨日の A さん」は、この出来事を体験した時にある程度の強さのショックを受けたであろうから、A さんの述べた出来事は (iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす出来事であるといえる。したがって、A さんの述べた出来事は、特徴 (i)～(iii) を満たす「あるある的出来事」であり、A さんはそれを言葉にした「あるある的表現」を発しているといえる。次に、聞き手である B さん注目してみる。B さんは、A さんの発した「あるある的表現」を聞くことで、普段は意識を向けることのない知識領域に光を当て、A さんの体験した出来事を事例とするようなスキーマや、そのスキーマの事例となっているような過去の自分の体験の記憶を掘り起こす。A さんと自分が同じスキーマを共有していること、そして、お互いがそのスキーマの事例である似たような経験をしたことがあるとわかった B さんは、A さんに対して (iv) 共感を抱く。B さんの「あー、あるあるだね」という発言からも、B さんの心の中に共感が生じていることが窺える。また、明示されてはいないが、A さんの失敗談を聞いて、B さんの心に (v) 笑いが込み上げていると推測するのはそれほど無理がないであろう。また、共感と笑いから、B さんの心には A さんとの間の (vi) 結束感や仲間意識が派生しているとも言えそうである。したがって、B さんには (iv)～(vi) の効果がある程度もたらされていると結論できる。このような観察から、A さんと B さんのやりとりは「あるある的コミュニケーション」であるといえる。

(2) の「あるある的コミュニケーション」について、いくつかの補足をする。まず、B さんの返答に「あるある」という言葉が含まれていることは特に重要ではない。例えば、B さんの返答が「あー、わかる」であったとしても、「残念だったね」であったとしても、B さんが A さんに共感を抱いていることが感じ取れ、上の説明と同様の仕組みで「あるある的コミュニケーション」が成立するといえる。B さんが「あはは」と笑った場合も、B さんに (v) 笑いが生じていることが明らかであるため「あるある的コミュニケーション」が成立する。もしも B さんが A さんと同様に前日に課題を提出し損なっており、A さんの発言に「友よ！」と返した場合でも、B さんの心には (iv) 共感が生じており、その発言から (vi) 結束感や仲間意識が生じていることも明らかであるから、「あるある的コミュニケーション」が成立しているといえる。しかし、B さんが無言で何の反応も示さなかった場合や、（冗談ではなく真面目に）「馬鹿みたい」などの言葉を返した場合には、聞き手に (iv) 共感、(v) 笑い、(vi) 結束感や仲間意識のどれも生じていないと推測されるため、「あるある的コミュニケーション」は不成立となる。

(2) のやりとりにおいては、A さんが自分の失敗談をわざわざ話しているということから、B さんに (iv) 共感や (v) 笑いや (vi) 結束感・仲間意識を生じさせようと意図していると推測して差し支えないだろう。ただし、話し手が聞き手に (iv) ~ (vi) の効果を生じさせようとする意図を持って言葉を発していない場合でも、聞き手に (iv) ~ (vi) の効果（の少なくとも一つ）がある程度生じていれば、そのコミュニケーションを「あるある的コミュニケーション」と呼んでよい。例えば、Twitter などの SNS 上で、ある人が誰に向けたわけでもなく呟いた言葉に対して、他の人が勝手に共感をして「あるあるですね」とコメントをつけたり、勝手に笑いを催して「ウケる w」などとコメントをしたり、その他様々のコメントや、「いいね」、「リツイート」などを通して、(iv) 共感や (v) 笑いや (vi) 結束感・仲間意識を示す場合がある。この場合、話し手（呟きの発信者）は聞き手（不特定多数のユーザー）に (iv) ~ (vi) の効果を生じさせようとする意図を持っているとは言い難い（あるいは、少なくとも、そのような意図を持っていないケースが確実に存在する）。このような場合でも、話し手（呟きの発信者）の発信した言葉が特徴 (i)~(iii) を満たす「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」を言語化した「あるある的表現」となっているのであれば、それを発したことが原因となって聞き手（不特定多数のユーザー）に (iv) 共感や (v) 笑いや (vi) 結束感・仲間意識が生じているといえるので、「あるある的コミュニケーション」が成立しているといえる。

(2) のやりとりでは、A さんは特徴 (i)~(iii) を持つ「出来事」を言語化している。これは (2) のやりとりの前日の特定の時刻に A さんという特定の人物が体験したトークンレベルの出来事の言語化である。しかし、「あるある的コミュニケーション」の定義でも述べているように、「あるある的表現」には、このようにトークンレベルの出来事を言語化したものの他に、そのトークンレベルの出来事の特徴の一部を取り出し、時刻や当事者などの情報を捨象したスキーマ（あるいはタイプ）を言語化したものもある。例えば (2) のやりとりで A さんの発言をスキーマレベルの「あるある的表現」にすると、「物事を締め切りの直前に行うと、何らかのトラブルに見舞われて、締め切りに間に合わないことってあるよね」などの表現になる。他にも、例え

ば「楽しみにしていたイベントの当日に限って雨が降る」や「ポケットの中身を出し忘れたままズボンを洗濯してしまう」（どちらも筆者の作例）のように、特徴 (i) ~ (iii) を満たした「あるある的スキーマ」を言語化した「あるある的表現」はたくさんあり、このような表現を発することが、日常的な意味での「あるある（ネタ）を言う」ことに相当すると考えられる。

以上では「あるある的コミュニケーション」を定義し、その具体例を提示して説明を加えた。「あるある的コミュニケーション」の定義には、「(i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられ、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」という「あるある的出来事」あるいは「あるある的スキーマ」の三つの特徴、そして「(iv) 共感を抱いたり、(v) 笑いを引き起こされたり、(vi) 結束感や仲間意識を感じたり」するという、聞き手に生じうる三つの効果が含まれていた。本節の残りの部分では、これら (i) ~ (vi) について、相互の関係にも言及しつつ、より詳しい説明を与える。

3.1. 「あるある的出来事/スキーマ」の特徴: (i) 無意識の知識領域に埋没している

「あるある的出来事/スキーマ」の一つ目の特徴は、「聞き手の無意識の知識領域に埋没している」ことである。「あるある的出来事/スキーマ」は、佐藤 (2021: 7) の言葉を借りれば、「言われれば（なんとなくでも）わかるのだけれど、言われなければ、埋没しているような知識領域」に存在しているものである。これは「あるある的出来事/スキーマ」にとって必須の特徴であり、普段から意識されることが多いような出来事やスキーマはあるある的とはなり得ない。例えば、「会計時にレジ袋が必要かどうかを聞かれる」というスキーマは、買い物をする人ならば普段から定期的に意識が向けさせられる内容を表しているため、あるある的とはなり難い。もっとも、これがあるある的となり難いのは、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こすという特徴をあまり満たしていないことも原因であると思われる。

「あるある的出来事/スキーマ」が無意識の知識領域に埋没しているからこそ、それが掘り起こされたときに気づきや驚きが生じる。川添 (2022: 36) は「あるある」と無意識の関係について以下のような考察をしている:

> 私たち人間は普段の生活において頻繁に一般化を行い、さまざまな法則性を見いだしている […] そういった法則性の中には、ほぼ無意識に発見され、意識に上らないまま心の奥底に保存されるものがある。だからこそ、そこに焦点を当てられると新鮮な驚きがあるのだろう。（川添 2022: 36）

無意識の知識領域に埋没していた「あるある的出来事/スキーマ」に光が当てられることで生じる気づきや新鮮な驚きは、聞き手が「あるある的表現」を聞いて「おもしろい」という (v) 笑いを催す要因の一つであるかもしれない。

3.2. 「あるある的出来事/スキーマ」の特徴: (ii) 馴染みがあるように感じられる

「あるある的出来事/スキーマ」の二つ目の特徴は、「言われてみれば馴染みがあるように感じられる」ことである。より正確には、出来事あるいはスキーマの内容が「過去にある程度の回数自ら経験した、あるいは見聞きした経験があるために、本当に馴染みがある」、または、「自分で経験したり見聞きしたりした経験はあまり（あるいは全く）ないけれど、それが現実的で容易に想像でき、あたかも馴染みがあるように感じられる」という特徴である。ここで、当該の経験が高頻度であるということ、すなわち、よくあることであるということは（おそらくは世間一般の直観に反して）「あるある的出来事/スキーマ」にとって必須ではないという点に注意されたい。聞き手があまり直接的にも間接的にも経験したことがない、さらには全く経験したことがないような内容でさえも、想像を通して馴染みがあるように感じられさえすれば、「あるある的出来事/スキーマ」であると認められる場合もある。

筆者はこのような、「(i)' 普段は想像しないが、(ii)' 言われて想像してみれば、実際には馴染みはあまり（あるいは全く）なかったとしても、何となく馴染みがあるように感じられ、(iii)' ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こすことが想像できる」という特徴を持つ出来事やスキーマも、「あるある的出来事/スキーマ」として認めたい。というのも、どのような出来事やスキーマが本当に馴染みのあるものであり、どのような出来事やスキーマが想像力によってあたかも馴染みがあるかのように感じられるだけであるのかを明確に区別することは、人間の記憶の不確かさを考えれば、しばしば不可能であるからである。明らかに誰もが頻繁に経験したことのある「本当に馴染みのある、あるある的出来事/スキーマ」と「完全に想像に頼るあるある的出来事/スキーマ」が両極に位置し、その間には経験したことがある気もするし無いような気もする「あるある的出来事/スキーマ」が多数存在していると考えるのが妥当である。

聞き手が十分に経験したことがなくても「あるある的出来事/スキーマ」になりうるという可能性については、他の研究者の指摘によっても支持される。佐藤 (2021: 8) は「あるある」を成り立たせている知識について言及し、「ありふれた内容」だけでなく「あってもおかしくない内容」も含むと述べている。また、川添 (2021: 37) も「あるあるネタ」について考察する中で、「頻繁には見ないけど実にそれっぽい状況」を言い表すタイプの「あるある」の存在を認めている。このような、想像に頼る「あるある的出来事/スキーマ」には以下のようなものがある。

(3) カレーうどんが食べたい時に限って白いシャツを着ている。（作例）
(4) 「歌舞伎」あるある…「歌舞伎役者のベテランは、鏡ごしに弟子を怒りがち」（RG 氏）

(3) は筆者が「あるある的スキーマ」であると考える作例である。カレーうどんが食べたいと感じた時に白いシャツを着ていたという経験はそれほど多くはないだろうが、そのような状況は（食べた場合のしばしば悲劇的な結果を含めて）容易に想像でき、いかにもありそうなことのように思える。(4) は、「あるある（ネタ）」の名手である芸人のレイザーラモン RG 氏による作品である。筆者も含め多くの人々は歌舞伎の楽屋で何が起こっているかを知る由はないのである

が、「歌舞伎役者が白粉を使用すること」、「白粉を塗ったり落としたりする際には鏡が使用されること」、「鏡には自分の背後の人や物が映り込むこと」、「上下関係がはっきりしている世界では、目上の者が目下の者の方を向きすらせず、いかにも偉そうに片手間で説教を垂れることがある」といった数々の常識や想像が基となり、描写されている内容に多少なりとも馴染みのある感じを抱くのである。

3.3. 「あるある的出来事/スキーマ」の特徴: (iii) 心理的反応を当事者に引き起こす

「あるある的出来事/スキーマ」の三つ目の特徴は、「ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」というものである。心理的反応の具体例としては、落胆したり、イライラしたり、恥ずかしいと感じたりするほか、「チクショー感」や「やっちまった感」とでも言うべき感情を抱くことなどが挙げられる。当事者に引き起こされる反応は、概してポジティブな反応よりも、ネガティブな反応が多いように思われるが、これは「あるある的出来事/スキーマ」を言語化して他人に話し共感を得たり笑い合ったりすることで話し手の心的負担の軽減が見込めることと関係しているかもしれない。以下に、「あるある的出来事/スキーマ」が当事者の心理的反応を引き起こしている具体例を挙げる。

(5)　学会発表の前日にパソコンが壊れる。（作例）
(6)　駅のホームに駆け下りた瞬間にちょうど電車の扉が閉まる。（作例）

(5) のように、学会発表の前日にパソコンが壊れたら、その当事者は「なんでこんな時に限って」と言いたくなるであろうし、タイミングの悪い不運に対する落胆や苛立ちの入り混じった気持ちが誘発されるであろう。(6) の当事者は、「もう少し早ければ間に合ったのに」というやりきれない思いやショックを抱くであろう。

「心理的反応」という言葉はやや漠然としているが、これは当事者の心に起こる反応が多種多様であり、例えば「感情」と言っては狭すぎるような気がするためである。筆者は「小学校には一年中半袖短パンの男の子がいる」を「あるある的スキーマ」であると考えているが、一年中半袖短パンの小学生を見ることで心に生じる何かを「感情」というのは言い過ぎのような気がするので、「心理的反応」とでも言わざるを得ない。「あたりまえ」として片付けられるのではなく、どんな形であれ「当事者の心に何かしらの爪痕を残す」くらいの意味で理解されたい。佐藤 (2021) は「あるある」について、ある程度印象的であることや、何かしらの形でインパクトがあることが必要であると指摘している。これは筆者の見解と軌を一にしているとともに、筆者と同様にやや漠然とした言い方である。

なお、心理的反応はあくまでも「あるある的出来事/スキーマ」の当事者に起こることが必須であり、それが言い表された時に聞き手に起こることは必須ではないことに注意されたい。もちろん、聞き手に心理的反応が起こる場合もあるだろうが、普通は、例えば、話し手に「昨日、学会発表の準備をしていたらパソコンが壊れちゃった」と言われた聞き手が「なんでこんな時

に限って」と言いたくなりはしないし、当事者のように落胆したり苛立ったりはしない。

3.4. 聞き手に生じる効果: (iv) 共感を抱く

聞き手に生じうる一つ目の効果は、「共感を抱く」ことである。より具体的には、聞き手が、話し手によって提示された「あるある的出来事」を事例の一つとするスキーマ、あるいは、話し手によって提示された「あるある的スキーマ」を、話し手およびその他の人々と共有していると感じ、そのスキーマやその事例である出来事がどのようなものであるかがわかると感じるという効果である。この効果は、話し手の発する「あるある的表現」を通して、その表現の基になった「あるある的出来事」を事例の一つとするスキーマや「あるある的スキーマ」を話し手と聞き手が共有しているということに聞き手の注意が向けられることが一因となって生じる。

聞き手が共感を抱く相手は話し手だけであるとは限らない。聞き手は、自分の周りに物理的に存在しているかいないかにかかわらず、当該のスキーマを共有し、その事例である出来事がどのようなものであるかわかっていると想定される話し手以外の人々に対しても共感を抱きうる。ただし、そのような全ての人々に対して、聞き手が同程度に共感を抱くとは限らない。例えば、対面での「あるある的コミュニケーション」の場合、聞き手は、話し手の言葉に「ある、ある！」などと言って反応している自分以外の聞き手に対して、その場にはいないけれども当該のスキーマを共有し、その事例である出来事がどのようなものであるかわかっていると想定される世の中の人々に対してよりも、より強く共感を抱くと考えられる。このように、対象に対して抱く気持ちの強さが、その対象の存在や不在などの要因により変わりうることは、後述する (vi) 結束感や仲間意識についても同様である。

3.5. 聞き手に生じる効果: (v) 笑いが引き起こされる

聞き手に生じうる二つ目の効果は、「笑いが引き起こされる」ことである。ここでいう「笑い」は「おかしい」、「おもしろい」、「興味深い」などいくつかの種類の笑いを含むが、冷笑などのネガティブな笑いは含まない。この効果は、話し手の発した「あるある的表現」によって、聞き手の注意が無意識の知識領域に向けられ、そこで眠っている何らかの形で印象的なスキーマやその事例が掘り起こされることが一因となって生じると考えられる。

ここで、どのような「あるある的出来事/スキーマ」が使用された際に、聞き手に笑いが生じやすいのかについて考えてみたい。笑える内容を表しているということは、少なくとも次の二つのことを示唆している。まず、笑えるということは、表されている内容にある程度の特筆性があることを聞き手が認めたということを示唆している[6]。実際、言うに値しないようなことを聞かされた場合に、聞き手がおもしろいと感じて笑うとは考えにくい。次に、笑えるということは、聞き手が表されている内容を深刻なものだとは捉えておらず、適度に取るに足らないと

[6] 笑いにも色々な種類があるが、ここでは主におもしろさによって生じる笑いについて言及しており、つまらない内容に対する皮肉めいた笑いなどは意図していない。

捉えていることを示唆している[7]。実際、内容が真面目であったり深刻であったりすれば、笑うことは憚られる。以上の二点を踏まえると、「あるある的コミュニケーション」で笑いが生じやすいのは、話し手が取り上げた「あるある的出来事/スキーマ」の内容が、聞き手にとって、ある程度の特筆性を持つと同時に、ある程度くだらなく取るに足らない場合であるといえる。笑いが起こりやすい「あるある的コミュニケーション」では、話題となる「あるある的出来事/スキーマ」の内容が、ある程度くだらないけれどもある程度言及に値するような、絶妙なレベルの特筆性を備えているのである。

3.6. 聞き手に生じる効果: (vi) 結束感や仲間意識を感じる

聞き手に生じうる三つ目の効果は、「結束感や仲間意識を感じる」ことである。この点に関して、Yamashita (2021: 220) も、「あるある」が同じ経験に慣れ親しんでいる人々の共感や団結感を呼び起こすということを指摘している。聞き手が結束感や仲間意識を感じる相手は話し手だけであるとは限らない。聞き手は、自分の周りに物理的に存在しているかいないかにかかわらず、話題となっているスキーマを共有し、その事例である出来事がどのようなものであるかわかっていると想定される話し手以外の人々に対しても、結束感や仲間意識を抱きうる。ただし、共感の場合と同様に、聞き手が結束感や仲間意識を感じる程度は、相手の存在や不在などの要因により変わりうる。

筆者はこの「結束感や仲間意識を感じる」という効果は (iv) 共感や (v) 笑いから派生されると考えている。というのも、何らかの物事や認識を共有していることはある集団の成員である証となりえ、笑いは警戒心を鈍らせ相手が敵であるかもしれないという感覚を弱めると考えられるからである。ただし、この点はまだ推測に過ぎず、今後さらなる検討が必要である。

(iv) 共感と (vi) 結束感・仲間意識は似ており、密接に関わっているが、筆者は両者を異なるものであると考えている。上で述べた通り、(iv) 共感からは (vi) 結束感や仲間意識が派生すると考えられる。その一方で、(vi) 結束感や仲間意識には必ずしも (iv) 共感は伴わないと思われる。例えば、アーティストのライブ会場で人々が同じリズムで手を振ったり体を揺らしたりしているとき、それらの人々の間にはしばしば (vi) 結束感や仲間意識が生じるが、だからといってそれらの人々が (iv) 共感を抱いているとは限らないであろう。

結束や仲間意識を育むという点において、「あるある的表現」は隠語や合言葉と共通している。内部でだけ共有された特定の言語表現の意味を理解し適切に使用できることが集団の正式な成員である証となるこれらの表現と同様に、「あるある的表現」は、それによって表されている内容を「あるある的」であると思えるかどうかという基準によって、「わかる側」と「わからない側」を区別する。ある言語表現を「あるある的表現」であるとみなした聞き手は、自らが「わかる側」に属していると感じ、他の成員たちとの連帯感や、「わかる側」への帰属感、そして場合によっては「わからない側」に属する人々に対する多少の優越感を抱くのである。

[7] ここでも、主におもしろさによって生じる笑いについて言及しており、深刻な事態に直面した際に強がってみせる笑いなどは意図していない。

このように、「あるある的表現」は仲間を括り、自らが「わかる側」に属すると感じる人々の間の結束感・仲間意識・連帯感・帰属感・優越感を育み、自らが「わかる側」に属さないと感じる人々に疎外感を感じさせる[8]。このことは、「都道府県あるある」や「業界あるある」のように、特定の集団やトピックに特化した「あるある的表現」が世の中に多数存在するという事実に反映されている。

第 3 節では、「あるある的コミュニケーション」の定義と具体例を提示して説明を加えた後、「(i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられ、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」という「あるある的出来事」あるいは「あるある的スキーマ」の三つの特徴と、「(iv) 共感を抱いたり、(v) 笑いを引き起こされたり、(vi) 結束感や仲間意識を感じたり」するという聞き手に生じうる三つの効果の、計六つのポイントについて詳述した。(i)~(vi) のキーワードである「無意識の (unconscious)」、「馴染みがある (accustomed)」、「(心理的) 反応 (response)」、「共感 (affinity)」、「笑いを引き起こす (risible)」、「結束 (unity)」の英語の頭文字をとって並べ替えれば、“aruaru” になる。

4. 「あるある的コミュニケーション」の道具としての句複合語

本節では、句複合語が「あるある的コミュニケーション」を成立させる仕組みを論じる。はじめに、ある内容が「語」で表されるということがいかなる意味を持つのかを論ずる。その後、句複合語が「語」であることと第 2 節の議論を踏まえ、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用であるとみなせる場合に、その句複合語の使用が「あるある的コミュニケーション」を成立させることを主張する。最後に、英語のアドホックな句複合語の実例を紹介しながら、これらの議論を具体的に説明する。

句複合語が「あるある的コミュニケーション」の成立に寄与する最大の要因は、句複合語が (その名の通り) 語であるということである[9]。語は、基本的には聞き手が知っている内容を表す際に用いられる。これは、聞き手が知らない内容が基本的には語ではなく句や文を用いて表されることと対照的である。また、聞き手が知っている内容を提示するという行為と、そのために語というパッケージを使用するという行為は慣習的に結びついており、人々はその結びつきを (無意識的であれ) 認識していると考えられる。この結びつきの力により、ある内容を語で表すという行為には、その内容が既知のものであるという聞き手へのメッセージが伴う。ある内容を語で表すということは、いわば「あなたはこの内容を知っていますよ」というメッセージ付きで内容を聞き手に送信するということであり、その内容を聞き手が知っているという体で提示するということである。

以上の「語」の特性と第 2 節の議論を踏まえると、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用であるとみなせる場合に、その句複合語の使用が「あるある

[8] これは自分が理解できない「内輪ネタ」を聞かされた時に感じるような疎外感と同様のものである。
[9] この段落で述べられている語の性質は、「文法の意味」研究会の皆様や他の研究者からの助言をもとに筆者が考察したものである。

的コミュニケーション」を成立させる仕組みを次のように説明することができる。まず、復習であるが、句複合語は modifier と、それに後続する名詞から構成されており、両者が組み合わさって全体としては語となっている。句複合語の modifier は、句複合語を発した時点の話し手とは別の他者（話し手以外の個人、話し手以外の大小さまざまな規模の集団、または過去の話し手）に当たる、modifier が喚起する「あるある的出来事」という架空の場面の当事者の、架空の言葉が引用されたものである。トークンレベルの架空の言葉が引用されていることで、トークンよりも上のレベル、すなわち、その架空の言葉が現れる出来事を事例の一つとするスキーマ（あるいはタイプ）に聞き手の注意が向けられる。ここで、語はそれが表している内容が聞き手にとって既知であるというメッセージを聞き手に伝えるということと、句複合語において modifier が語の中に埋め込まれていることを考え合わせると、modifier を介して聞き手の注意が向けられるスキーマもまた、聞き手にとって既知のものであるという体で提示されていると考えられる。すなわち、「あなたの頭の中にもこのスキーマが存在していますよ」というメッセージが聞き手に伝達されるのである。このメッセージを受信した聞き手は、普段は意識を向けることのない知識領域にサーチライトを当て、自らの脳内で知らず知らずのうちに抽出され眠っていた「あるある的スキーマ」を発見する。そして、そのスキーマが抽出されるのに一役買った過去の「あるある的出来事」の経験がよみがえる。話し手の句複合語の使用によって、無意識の領域に眠っていた「あるある的スキーマ」やその事例である「あるある的出来事」を掘り起こされた聞き手は、共感を抱いたり、笑いを催したり、結束感や仲間意識を感じたりする。このようにして、句複合語は「あるある的コミュニケーション」を成立させる。

また、以上のプロセスと並行して、Pascual (2014) が指摘しているような modifier が持つ直接話法的な効果により、聞き手は modifier で引用されている架空の言葉が現れる出来事が、あたかも目の前で生じているかのような感覚を抱く。ここで聞き手は、modifier の引用元である架空の言葉を生んだ「あるある的出来事」の当事者と自分を重ね合わせ、その当事者の視点から、その架空の言葉を発するシミュレーションを行う。このように、聞き手が「あるある的出来事」の当事者に自己を移入させるという体験は、単に臨場感を生むだけではなく、modifier を介して注意を向けさせられる「あるある的スキーマ」およびその事例である自分に起きた過去の「あるある的出来事」を、聞き手が頭の中から掘り起こす一助となると思われる。

第３節で、「あるある的コミュニケーション」においては話し手が聞き手に (iv)～(vi) の効果を生じさせようと意図しているとは限らないと述べた。しかし、話し手が句複合語を使用する場合には、話し手は聞き手に少なくとも (iv) 共感と (vi) 結束感や仲間意識を抱かせようとする意図を持っていると考えられる。その理由は、句複合語が語であることに求められる。句複合語を使用する話し手は、「あるある的出来事」のスキーマを喚起する modifier を語の中に埋め込み、喚起されるスキーマを聞き手が既知のものであるという体で提示している。これはいわば、その「あるある的スキーマ」を自分と共有しているという感覚を聞き手に強制しているということであり、聞き手に共感を抱かせようとしているといえる。また、共感から結束感や仲間意識が派生すると考えれば、話し手は聞き手に結束感や仲間意識を抱かせようともしている

といえる。

句複合語を用いて表されている内容は、実際には馴染みがあまり（あるいは全く）無いようなものであっても、あたかも本当に馴染みのある内容であるかのように感じられてしまうことがある。このような事態が生じるのも、句複合語が語であるがゆえである。馴染みがあるかわからない出来事であっても、語の強制力が、その出来事のスキーマが既知であるという認識を聞き手に与え、そのスキーマやその事例である出来事に対して馴染みのある感じを聞き手に抱かせるのである。「あるある的コミュニケーション」との関連でいえば、句複合語は、普通の言い方で表された場合には「あるある的出来事」とは認められないような出来事のスキーマに対する馴染みのある感じ強め、そしてそれに伴い、その事例である出来事に対する馴染みのある感じを強めることで、基の出来事を「あるある的出来事」に昇格させ、それを「あるある的コミュニケーション」の資源として用いることができるようにする役割を果たしているといえる。

以上の議論を踏まえた上で、以下では英語のアドホックな句複合語の実例を観察する。実例の収集には、ウェブ上の英語を収録した大規模コーパスであり、多様な句複合語の実例を収録している English Web 2015 (version enTenTen15_tt31, March 2020) を用いた。実例の収集に際してはハイフンを手掛かりに検索を行った[10]。以下に提示する例文は全て English Web 2015 から収集したものであり、太字による強調以外の改変を加えずに、誤植なども含めてそのまま提示している。日本語訳は全て筆者による。

(7) “I was just getting home and ready to go to bed; I had been up for more than 24 hours,” Nelson says. He checked his email before going to sleep and was hit by that **oh-crap-I-forgot-about-that feeling**.[11]
「ちょうど家に着くところで、今にも寝ようとしていました。24 時間以上起きっぱなしだったんです。」とネルソン氏は言う。彼は寝る前に電子メールをチェックして、例の**「しまった、忘れてた」という気持ち**に襲われた。

(7) の句複合語の modifier は、書き手とは異なるネルソンという他者の架空の言葉が引用されたものである。読み手は modifier で引用されているネルソンの架空の言葉が現れる出来事を思い描き、ネルソン視点でその架空の言葉を発するシミュレーションを行う。引用の機能によって、聞き手はその架空の言葉とそれを取り巻く出来事を事例の一つとするスキーマに注意を

---

[10] Sketch Engine で CONCORDANCE を利用し、CQL に以下の検索式を入れ、直後に名詞が後続するという条件を指定すると 51984 件のヒットがある:
[word!=".*http.*"&word!=".*www.*"&word!=".*/.*"&word!=".*[0-9].*"&word!=".*-
-.*"&word!=".*@.*"&word!=".*-.-.-.*"&word!=".*-
"][word=".+-.+-.+-.+-.+"&word!=".*http.*"&word!=".*www.*"&word!=".*/.*"&word!=".*[0-9].*"&word!=".*-
-.*"&word!=".*@.*"&word!=".*-.-.-.*"]
なお、この検索式では modifier にハイフンが 4 つ以上用いられている句複合語がヒットする。「ハイフンが 4 つ以上」という指定は、本稿の興味の範囲外である慣習的な表現（例えば “state-of-the-art approach(es)” など）が大量にヒットするのを防ぐためである。

[11] (7) を含む記事は、2022 年 6 月 2 日現在、インターネット上で次の URL から閲覧することができる。<https://www.techinasia.com/ama-reddit-mentorverse-viral> これは English Web 2015 が (7) を収集した URL とは異なるが、記事は同一のものであると思われる。

向けさせられる。(7) の例においては、そのスキーマはおおよそ「ようやく待ち望んでいた一時を迎えられると思いきや、完全に忘れていた仕事を思い出す」というようなものである。この句複合語で主要部名詞はこのスキーマの特定の部分（この場合は、当時者であるネルソンの気持ち）に焦点を当てる役目を果たしている。このスキーマは (i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みを感じるであろうし、(iii) 当事者には「しまった！」という落胆や、自らの愚かさを悔やむ気持ち、または「もう、うんざり」といった心理的反応を引き起こす。したがって、このスキーマは「あるある的スキーマ」である。このスキーマを喚起する modifier が語の中に入れられて提示されているために、読み手はこのスキーマが自分の頭の中にもあるはずだという認識を強制される。読み手は無意識の知識領域にサーチライトを当て、そこに眠っている当該のスキーマ、そしてそのスキーマの事例となっている過去の出来事を発見する。当該のスキーマを共有しているという認識を強制された読み手は (iv) 書き手（またはそのスキーマを共有していると想定される人々）に対して共感を抱き、眠っていた印象的なスキーマを掘り起こされることで (v) 笑いを引き起こされ、共感や笑いが原因となって、(vi) 書き手（またはそのスキーマを共有していると想定される人々）に対する結束感や仲間意識を抱く。(7) の書き手は、句複合語を用いることで、このような仕組みで読み手との間に「あるある的コミュニケーション」を成立させている。

(8) Saturday, my husband and I made our **“oh-my-god-Thanksgiving-is-Thursday-and-the-cupboard-is-bare” Costco run**.[12]
土曜日、夫と私は**「しまった、感謝祭木曜なのに戸棚が空っぽ」コストコ超特急**をした。

(8) の句複合語の modifier は、句複合語を使用した時点での書き手とは異なる「過去の書き手およびその夫」という他者の架空の言葉が引用されたものである。読み手の注意が向けられるスキーマはおおよそ「目前に迫ったイベントのために必要なものが無いことに気がつく」というようなものである。書き手が句複合語を用いて「あるある的コミュニケーション」を成立させる仕組みは (7) の場合と同様である。

この例で一つ注意すべき点は、主要部名詞の役割である。(7) の句複合語では、主要部名詞は「あるある的スキーマ」の一部に焦点を当てる役割を果たしていた。しかし、(8) の句複合語では、“Costco run” という（複合語である）主要部名詞は、スキーマの内部に焦点を当てるのではなく、スキーマが表している内容に続く行動の内容を表している。この句複合語を適切に理解するには、「感謝祭には料理に使う食材などたくさんの品々の準備が必要である」、「コストコでは大量の食料品などを比較的安価に購入できる」などの背景知識を基に、「戸棚が空っぽである」という状況と「コストコに直行する」という行動の自然な繋がりを捉える必要がある。このように、文脈や百科事典的知識などを利用して、非主要部と主要部の関係を捉える必要があるの

[12] (8) の出典は次のブログ記事である。<https://sheilakennedy.net/2013/11/a-candid-cashier/>

は、通常の複合語の場合と同様である。

また、この句複合語の modifier の引用元である「過去の書き手およびその夫」の架空の言葉から想像される彼女らの「慌てふためきっぷり」は滑稽で笑いを誘う。句複合語はあくまでも、語の強制力を通して (iv) 共感を生じさせたり、無意識の知識領域に眠っているスキーマやその事例を掘り起こして (v) 笑いを引き起こしたり、共感と笑いから (vi) 結束感や仲間意識を感じさせたりすることで「あるある的コミュニケーション」の成立に貢献するのであるが、この例のように、架空の言葉やそれが現れる出来事の内容自体がおもしろいことで、聞き手に生じる (iv)~(vi) の効果（この場合は特に (v)）が高まり、そのことが結果的に「あるある的コミュニケーション」の成立に寄与するということは往々にしてある。

(9) "In a **he-probably-regretted-it-the-moment-it-came-out-of-his-mouth moment**, county transportation chief Dennis Leach referred to the $10 million change as simply a "slight increase."[13]
きっと言葉が口から出てすぐ後悔しただろうなあという感じの瞬間だったが、デニス=リーチ群交通局長は、1000 万ドルの変化を単に「微増」と表現した。

(9) の句複合語の modifier は、句複合語を使用した時点での書き手とは異なる「過去の書き手」という他者の架空の言葉が引用されたものである。読み手の注意が向けられるスキーマはおおよそ「誰かが何らかの言葉を口に出した後すぐに、それを言ったことを後悔するのを目撃する」というようなものである。「あるある的コミュニケーション」成立の仕組みについては (7) や (8) と同様である。

(10) The Adopteen Camp-Conference is NOT a cultural camp or a therapy session. It is NOT a week-long **"let's sit down and talk about adoption" conference**. It is NOT a **sit-in-a-big-room-and-listen-to-important-people-talk event**.
アダプティーン・キャンプカンファレンスは、文化体験キャンプでも治療集会でもありません。一週間にわたる**「養子縁組についてじっくり話しましょう」という会議**でもありません。**大きな部屋に座って偉い人の話を聞こう系のイベント**でもありません。

(10) には 2 つの句複合語が現れている。どちらの句複合語の modifier も、架空の会議やイベントに参加する架空の人（あるいは人々）が（口に出して、あるいは心の中で）発すると想定される架空の言葉が引用されたものである。読み手の注意が向けられるスキーマは、順に、おおよそ「何かのテーマについてじっくりと話し合う」や「著名人が一方的に話すのをただ座って聞く」というようなものである。「あるある的コミュニケーション」成立の仕組みについては

[13] (9) を含む記事は、2022 年 6 月 2 日現在、インターネット上で次の URL から閲覧することができる。<https://www.insidenova.com/news/arlington/new-funding-plan-for-columbia-pike-streetcar-relies-more-on-commercial-surtax/article_ee1c304a-0e8b-11e4-a837-0019bb2963f4.html> これは English Web 2015 が (9) を収集した URL とは異なるが、記事の内容は（おそらく）同一であると思われる。

既に挙げた例と同様である。

(11) That Sunday afternoon in March was the beginning, the awakening, my **Helen-Keller-at-the-water-pump moment**, when awareness flashes into existence, when that which before was only vaguely seen or felt becomes distinct, clear, and compelling.[14]
その 3 月の日曜の午後は、始まりであり、発見であり、私にとっての**「揚水ポンプでのヘレン=ケラー」的瞬間**だった。気づきがパッと現れ、それまでぼんやりとしか見たり感じたりできていなかったものが、はっきりと立ち現れてきて、どうにも頭から離れなくなった。

(11) の句複合語の modifier は、句複合語を使用した時点での書き手とは異なる「過去の書き手」が、その発見的出来事が起こった際に、自身の体験との類似性のある、ヘレン=ケラーにまつわる有名なワンシーンを思い描いて、おそらくは心の中で発した架空の言葉が引用されたものである。読み手の注意が向けられるスキーマはおおよそ「何かのきっかけで物事が一気にはっきりと分かるようになる」というようなものである。「あるある的コミュニケーション」成立の仕組みについては、既に挙げた例と同様である。

(12) We bought 27 pumpkins in total and when you have 27 pumkins to carve, it is best to take a **Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence approach**. Carving pumkins until your fingernails erode is fun! That's what I told Géraldine ...[15]
僕たちは計 27 個のかぼちゃを買った。27 個も彫るとなると**「トムソーヤ流、杭垣漆喰塗りアプローチ」**を取るのが最善だ。指の爪がすり減るまでかぼちゃを彫るのは楽しい！僕はそうジェラルディーンに言った…

最後に、ハロウィーンの準備について書かれた (12) を見てみよう。(12) の句複合語の modifier は、句複合語を使用した時点での書き手とは異なる「過去の書き手」が、かぼちゃを彫る戦略を思案した際に、トムソーヤの冒険のワンシーンを思い浮かべて、おそらくは心の中で発した架空の言葉が引用されたものである。読み手の注意が向けられるスキーマはおおよそ「一人でやるには大変な作業を、楽しいふりをして行うことで、他の人々の協力を得て、早く片付ける」というようなものである。このスキーマは多くの人にとってそれほど馴染みがあるとは感じられないと思われる。それにもかかわらず、このスキーマの内容が句複合語を用いて伝達されると、読み手はなんとなく馴染みがあるような感覚を抱いてしまう。その理由は既に述べた通り、このスキーマを喚起する modifier が語に埋め込まれており、読み手にそのスキーマが

[14] (11) の出典は次の記事である。<https://desertreport.org/confessions-of-a-late-bloomer/>
[15] (12) の出典は次の記事である。<http://www.jeremymercer.net/2007/12/02/the-majesty-of-halloween/> この例は細谷 (2021, 68–69) でも取り上げられているが、そこでは「あるある的コミュニケーション」についての言及はなされていない。

既知のものであるという認識を強制するからである。結果として、(12) の句複合語を読んだ人は、なんとなくそういう「あるある的スキーマ」があるのだろうという感覚を抱いてしまうのである。

本節では、句複合語が「あるある的コミュニケーション」を成立させる仕組みを論じ、英語の句複合語の実例を観察して、それらが「あるある的コミュニケーション」を成立させる様子を確認した。もちろん、全ての句複合語が「あるある的コミュニケーション」を成立させると主張するつもりはない。あくまでも、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用であるとみなせる場合には、上で述べたような仕組みにより「あるある的コミュニケーション」が成立すると主張しているのである。例えば、筆者には脚注 3 で挙げた "the Charles and Di syndrome" (Lieber 1992: 11) が「あるある的コミュニケーション」を成立させるようには感じられない。これは、modifier の "Charles and Di" が、「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用とみなし難いことが原因であると思われる。「あるある的コミュニケーション」を成立させるようには感じられない句複合語を他にも集め、それらの「あるある的コミュニケーション」不成立がこれと同様の理由で説明できるのかどうかは、今後さらに検証していく必要がある。

5. 結語

本論文では「あるある的コミュニケーション」という新たなコミュニケーション形態を定義して考察した。「あるある的コミュニケーション」とは、話し手が「(i) 普段は無意識の知識領域に埋没しているが、(ii) 言われてみれば馴染みがあるように感じられ、(iii) ある程度の強さの心理的反応を当事者に引き起こす」という特徴を持つ出来事、あるいはそのような特徴を持つスキーマを言葉で言い表した結果、聞き手が「(iv) 共感を抱いたり、(v) 笑いを引き起こされたり、(vi) 結束感や仲間意識を感じたり」するようなコミュニケーションである。(i) ~ (iii) の特徴を持った個々の出来事を「あるある的出来事」、(i) ~ (iii) の特徴を持ったスキーマを「あるある的スキーマ」、「あるある的出来事」や「あるある的スキーマ」を言葉で言い表したものを「あるある的表現」と呼ぶ。本稿では、句複合語の modifier が「あるある的出来事」の当事者の架空の言葉の引用であるとみなせる場合に、その句複合語の使用が「あるある的コミュニケーション」を成立させることを主張した。その仕組みは次の通りである。まず、句複合語の modifier がトークンレベルの架空の言葉の引用であることで、トークンよりも上のレベル、すなわち、その架空の言葉が現れる出来事を事例の一つとするスキーマに聞き手の注意が向けられる。句複合語は語であり、その一部である modifier は語の中に埋め込まれている。また、語はそれが表している内容が聞き手にとって既知であるというメッセージを伝達する。これらを考え合わせると、modifier を介して聞き手の注意が向けられるスキーマもまた、聞き手にとって既知のものであるという体で提示されることになる。自分の頭の中にも当該のスキーマが存在しているという認識を強制された聞き手は、普段は意識を向けることのない知識領域にサーチライトを当て、自らの脳内で知らず知らずのうちに抽出され眠っていた当該のスキーマを発見する。

そして、聞き手の脳裡には、そのスキーマが抽出されるのに一役買った過去の「あるある的出来事」の経験がよみがえる。当該のスキーマが自分にとっても既知のものであるという体で提示されることから、聞き手は強制的に、そのスキーマがどのような内容であるのかがわかるという感覚、そして話し手（および他の人々）と同じスキーマを共有しているという感覚を抱かされる。すなわち、聞き手の心には共感が生じる。また、無意識の知識領域にあった「あるある的スキーマ」や、その事例である「あるある的出来事」が掘り起こされることによって、聞き手の心に笑いが生じる。さらに、共感や笑いが基になって、聞き手の心に結束感や仲間意識が派生される。このようにして、話し手と聞き手の間で「あるある的コミュニケーション」が成立する。

句複合語を用いて表されている内容は、実際には馴染みがあまり（あるいは全く）無いようなものであっても、あたかも本当に馴染みのある内容であるかのように感じられてしまうことがある。これは、馴染みがあるかどうかわからない出来事であっても、語の強制力が、その出来事のスキーマが既知であるという認識を聞き手に与え、そのスキーマやその事例である出来事に対して馴染みのある感じを聞き手に抱かせるためである。たとえ聞き手に馴染みのなさそうな出来事について語るときでも、句複合語を使用することで、聞き手の心に「たしかにそういうことあるかも…」という感覚を芽生えさせることができるのである。

参考文献

Clark, Herbert. H. and Richard J. Gerrig (1990) Quotations as demonstrations. *Language* 66(4): 764–805.

Crawford Camiciottoli, Belinda (2019) ‘My almost-leggings-so-I’m-kind-of-cheating jeans’: Exploring hyphenated phrasal expressions in fashion discourse. *Text & Talk* 39(1): 1–24.

English Web 2015 (version enTenTen15_tt31, March 2020). Sketch Engine. https://www.sketchengine.eu/

Günther, Christine, Sven Kotowski and Ingo Plag (2018) Phrasal compounds can have adjectival heads: Evidence from English. *English Language & Linguistics* 24(1): 75–95.

Hein, Katlin (2017) Modeling the properties of German phrasal compounds within a usage-based constructional approach. In: Carola Trips and Jaklin Kornfilt (eds.) *Further investigations into the nature of phrasal compounding*, 119–148. Berlin: Language Science Press.

平沢慎也 (2021)「X thing 構文の引用機能と心的態度の非共有を示す機能」『教養論叢』142: 145–189.

細谷諒太 (2021)「慣習性に基づいた英語の句複合語構文」*Colloquia* 42: 63–74.

川添愛 (2022)「あるあるネタはなぜ人を笑顔にしがち♪なのか」*UP* 591: 32–39.

Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing morphology: Word-formation in syntactic theory*. Chicago: Chicago University Press.

Pascual, Esther (2014) *Fictive interaction: The conversational frame in thought, language, and discourse*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Recanati, François (2001) Open Quotation. *Mind* 110: 637–687.

佐藤らな (2021)「Don't be that guy から考える世界の見え方」日本英語学会第 39 回大会ワークショップ. オンライン. 2021 年 11 月 13 日.

Trips, Carola and Jaklin Kornfilt (2017) Further insights into phrasal compounding. In: Carola Trips and Jaklin Kornfilt (eds.) *Further investigations into the nature of phrasal compounding*, 1–11. Berlin: Language Science Press.

Yamashita, Rika (2021) Connecting the personal to the collective: The haafu aruaru (things that happen to racially/ethnically 'mixed' people) narratives on Twitter. In: Judit Kroo and Kyoko Satoh (eds.) *Linguistic Tactics and Strategies of Marginalization in Japanese*, 213–232. Cham: Palgrave Macmillan.

English Phrasal Compounds as Aruaru Expressions

Hosoya, Ryota
ryotahosoya@keio.jp

Keywords: phrasal compound, aruaru communication, quotation, fictive interaction

Abstract

This paper examines "aruaru communication": a new form of communication in which a speaker presents a particular event or an event's schema that (i) is buried in the realm of unconscious knowledge, (ii) induces a sense of accustomedness, and (iii) elicits somewhat strong psychological responses from the participant, and in which a listener (iv) feels an affinity, (v) finds something risible, and (vi) feels a sense of unity and camaraderie. This article claims that, if the modifier of a phrasal compound can be regarded as a fictive quotation from the words of a person involved in an event that has the features (i), (ii), and (iii) (an "aruaru event"), the use of the phrasal compound contributes to achieving successful aruaru communication.

（ほそや・りょうた　慶應義塾大学大学院）